

## 少女の絵姿から見た日本の「東西融合」

戴 嵐（華東師範大学民俗学専攻博士生） DAI Lan

非文字資料の重要な一部として、図像は日常生活の場面を固定し保存する役割を果たしている。時間序列に従い、各時期の図像を集めてみると歴史の流れの中における生活や教育、それらの図像に潜むある種の情緒の変化が現れてくると思われる。少女の絵姿の変化から、日本と西洋の文化の要素が有機的に融合しているのが見える。

日本の少女の可愛らしさや純情などの東洋の伝統的な審美的特徴は、図像に表現されていると思われる。二週間の現地調査で、博物館の展示品から印刷物や街角の広告まで、昔の浮世絵から現代生活の中の漫画まで実例を探し、少女の絵姿が変化してきた大概の様子が少し分かった。1876年から明治政府によって、幼稚園が設立され、女性教育を充実させ、女性を良妻賢母に育てようとした。その良妻賢母のイメージは、唐の時代からの儒家思想と西洋文化が融合した結果と思われる。図1（1906年の『少女界』第5巻第1号の表紙）に描かれている少女から、このような女性教育の観念が見られる。可愛らしい丸顔の少女らは、着物を身に纏い下駄を履いて遊ぶ場面から、良妻賢母の伝統女性教育理念のモデルが浮かんでくる。少女が琴棋書画や、園芸、割烹などを習得する場面も、絵や双六などに頻りに登場している。

20世紀50年代から、少女の絵姿に、現在の漫画に描かれている少女のような顔がよく見られるようになった（例えば、50年代の手塚治虫の少女をテーマとした漫画）1978年の『少女週刊』の表紙に描かれた少女は、



図1



図2

口が小さいのを除くと、東洋的審美が見られない現在の最もポピュラーな少女イメージ 魔法能力を持ち、姿が美

しく、目が大きく輝き、ミニスカートを穿き、足が細く長いという共通した特徴を持つ は少女たちを虜にしている。街角の様々な広告に使われる少女の画像も、ほとんどこのような姿である。大正時代からの幼児教育では、欧米の新しい教育思想を取り入れ、個性や自発性、自主性を追求するようになった。その結果は現在の少女の絵姿にも窺えると思う。色とりどりの髪、活発で賢く、俗世に超然としている少女のイメージの特徴が段々見えてきた。こうしたファッションへの追求にも、西洋的な審美趣味への意識的な模倣と受容が潜んでいると考えられる。

少女の絵姿は、時代の変容と審美的傾向の変化を記録する役割を果たしてきたと思われる。伝統と現代、東洋と西洋の要素がこれらの「非文字」資料に有機的に融合されている。現在、商品化された娯楽文化の中で、視覚文化の多くは現実を超えた幻想性を持っている一方、ある程度本土的要素（服飾の特徴や髪形など）を保っている。人物の顔の同一化、互いの模倣やコピーは、日本の東西融合のテクニクと影響力を反映している。非文字資料の価値から見れば、これらの図像は、その年代の日本における、ある情緒を表しているのではないと思われる。

日本の少女の絵姿は東洋と西洋の顔の特徴を曖昧にし、ある程度東洋的審美趣味を保ちつつ、西洋的特徴を取り入れ、異国的な雰囲気や漂わせ、真実と幻想が混じっている中間効果を作り出した。「マンガ革命」がアメリカを席卷したことは、日本における東西融合の実践のもう一つの成功であることを、ある側面から証明したのであろう。

（戴嵐氏は2006年7月6日～7月19日訪問研究員として来日。）

- (1) ここで議論したい「少女」とは、現在流行っている少女漫画の中の、性的特徴が鮮明な思春期の少女及びその恋愛を題材とした図像ではなく、年齢から言えば、むしろ「女童」に近いものである。
- (2) 「Manga Revolution」とは、2005年6月に、ニューヨークで行われた図書展示会で、Tokyopop社が使用したスローガンである。2005年8月30日の「中華読書報」の国際セクションは、アメリカでのマンガの勢いについて紹介した。その紹介によると、英語バージョンのマンガはまだ完全に土着化されていなく、明らかな日本出版物の特徴を持っている 5×7インチの小型本で、右開きである。これは出版社の商業手段であるが、ある側面からみれば、日本は東西文化を融合させながら、自分の文化も保っていくという特徴を反映しているのではないと思われる。